

取手ゆかりの人びと

平成18年10月24日(火)～12月22日(金)

午前10時から午後4時30分まで(入館は4時まで) *休館日/月曜日のみ *入館無料



菊池幽芳著「己が罪」口絵(取手市立図書館所蔵)

沢近嶺

頼山陽と市河米庵

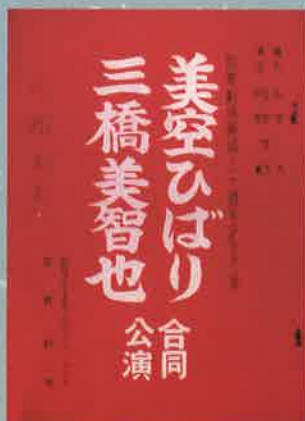
四代目高砂五郎次

菊池幽芳

坂口安吾と淀橋太郎

高野素十と軽部烏頭子

高村光太郎



淀橋太郎が手がけた台本(白井キミエ・美登利氏所蔵)



山王公民館玄関前の高野素十句碑

取手市埋蔵文化財センター

開催にあたって

取手市埋蔵文化財センターでは、平成11年の開館以来これまで19回の企画展を開催してきました。今回20回目の企画展開催を記念して、「取手ゆかりの人びと」を開催いたします。

江戸時代の取手は、宿場町として、また利根川水運の河岸として栄えてきました。明治以降の取手も、水陸交通の要衝として、さらには茨城県南の中核都市として発展してきました。そして多くの人びとが行き交った取手には、著名な人びとが一時期とはいえ、かかわりを有しました。

家庭小説の第一人者菊池幽芳、戦後の人びとの心に大きな影響を与えた作家の坂口安吾、安吾と親交の深かった劇作家の淀橋太郎、「利根川のみしさは空間の美である」の名言を残した詩人の高村光太郎などです。

その一方取手の出身で、それぞれの分野で功績を残した人びともいました。

江戸時代に国学者として名をはせた沢近嶺、高砂部屋の四代目年寄を襲名した高砂五郎次、俳人として教科書にも作品や名前が出ている高野素十、同じく俳人として活躍した軽部烏頭子です。

今回の企画展では、これらの人びとの業績と足跡を、取手の歴史とのかかわりの中で紹介します。これを機会に、取手ゆかりの先人たちの足取りに思いをはせ、郷土への関心と愛着を深めていただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の記念企画展の開催にあたりご協力をたまりました関係各位にたいしまして、深甚なる謝意を表して開催のあいさつとさせていただきます。

平成18年10月

取手市埋蔵文化財センター

講演会

「俳人・高野素十を語る」

講師：前野 茂 氏（取手市文化財保護審議会副会長）
日時：11月4日（土）午後2時から3時
会場：旧取手宿本陣染野家住宅
定員：50名（当日受付順）

「菊池幽芳と明治・大正の新聞小説」

講師：金子 明雄 氏（日本大学文理学部教授）
日時：11月25日（土）午後1時30分から3時
会場：センター2階講座室
定員：40名（当日受付順）

公開講座（取手市郷土史研究会と共催）

「戸頭の家老原家と頼山陽・市河米庵」

講師：センター職員
日時：10月28日（土）午後1時30分から3時
会場：センター2階講座室
定員：40名（当日受付順）

菊池幽芳ゆかりの

長禅寺三世堂（県指定文化財）の内部特別拝観

日時：11月3日（金・祝日）から5日（日）
午前10時から午後4時（入堂は3時30分まで）
拝観無料

展示説明

10月28日 } 午前11時から
11月25日 }

10月29日 } 午後2時から
11月11・12・26日 }
12月9・10日 }

予約不要、当日展示室においでください。

例 言

1. このパンフレットは、平成18年10月24日から12月22日まで開催される取手市埋蔵文化財センター第20回記念企画展「取手ゆかりの人びと」にともない、発行されたものです。
2. この企画展の企画とパンフレットの執筆・編集は、当センター職員の飯島章が担当し、その他職員の協力を得ました。
3. この企画展の開催にあたり、次の方々からのご協力とご助言をいただきました（敬称略）。記して深謝の意を表します。

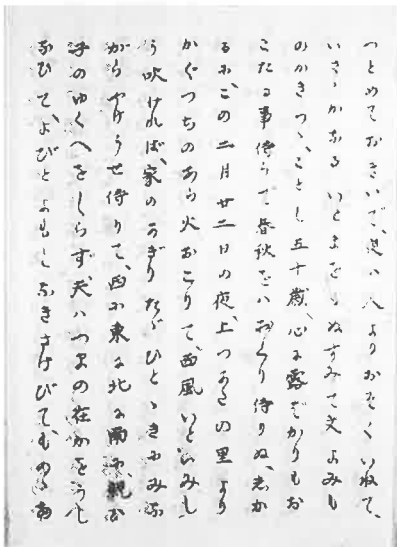
白井キミエ、白井美登利、故海老原光義、海老原祥一、海老原千義、海老原恒久、海方光胡、海方玉枝、軽部春朗、北川太一、小池弘悌、小島和馬、坂口綱男、坂部豪、塩谷修、染野修、田中督人、寺田秀也、中村春樹、貫井徹、平田満男、平本重男、平本重喜、前野茂、宮本俊輝、宮本礼子、村内必典、森田忠治、山崎英太郎、稲敷市立歴史民俗資料館、葛城市相撲館けはや座、株式会社マルジュ社、京都国立博物館、京都大学総合博物館、世田谷区立世田谷文学館、財団法人常陽藝文センター、千葉県立中央図書館、長禅寺、土浦市文化財愛護の会、土浦市立博物館、念仏院、水戸市立五軒小学校、水戸市立中央図書館

1. 沢 近嶺

沢近嶺は、天明8年（1788）に取手宿に生まれました。本姓は谷沢、幼少のころは吉次郎、定次郎といい、家は食料雑貨を販売する商家で、屋号は油屋、代々与兵衛を称していました。最初は龍ヶ崎の杉野翠兄や取手宿の東春郷に学び、20歳の時に江戸に出て国学者として名高い村田春海の弟子となり、小山田与清、清水浜臣とともに「錦門の三傑」（村田春海の号は織錦齋^{にしごりやのあるじ}）と呼ばれ、その名声をうたわれました。

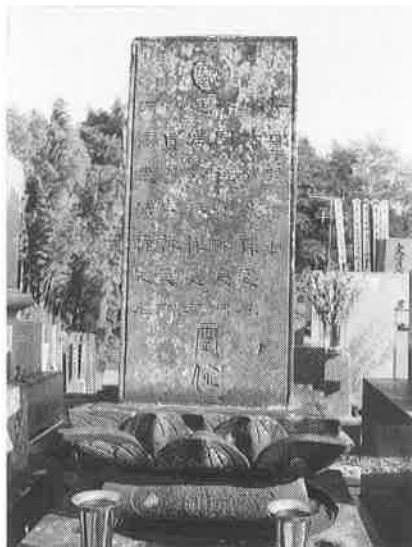
後に取手宿に戻り、家業を営みながら学問や和歌に励みましたが、その境遇は恵まれていたとはいえなかったようです。さらに天保8年（1837）の取手宿の大火で、収集した蔵書や書きためていた原稿をすべて失ってしまいました。失意に沈んだ近嶺でしたが、気を取り直して唯一の著作となった「春夢独談」を執筆しました。しかし「春夢独談」が書きあがると、天保9年に51歳で亡くなりました。

近嶺も江戸に住み多くの弟子を取り、著作を次から次にと出版していれば、もっと有名になっていたでしょうが、取手宿の一文化人として、どんな不遇にもめげず誠実に生き貫いた生涯こそが、人びとの心を引き付けるともいえるのです。お墓と昭和18年（1943）に県南読書会によって建てられた歌碑が、念仏院の境内にあります（写真は4頁）。



沢近嶺著「春夢独談」
（千葉県立中央図書館所蔵）

天保8年の取手宿の大火で家が焼失して、蔵書や原稿をすべて失ってしまった事が書かれているところです。11月1日から会期終了まで展示します。



念仏院境内の沢近嶺の墓（市内東）



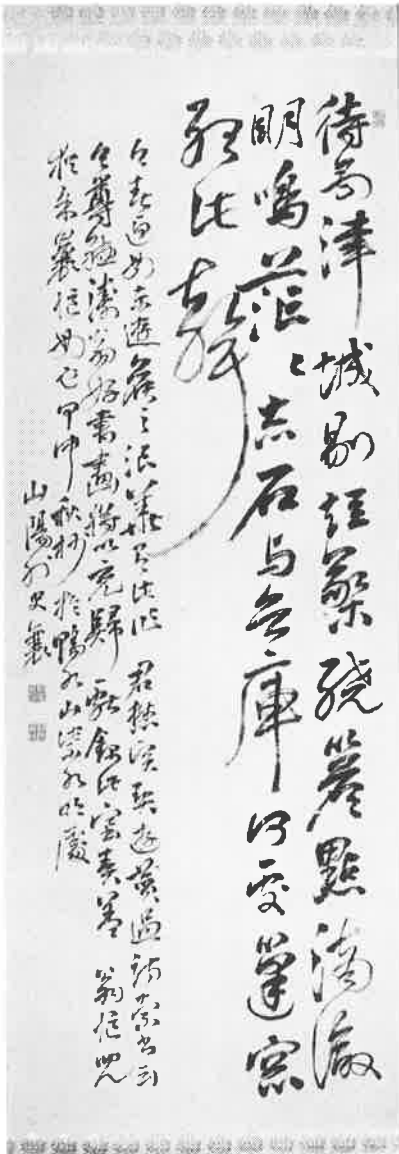
「東西美術新報」第52号（個人蔵）
昭和7年7月20日に発刊された52号と、同年10月30日発刊の53号は、沢近嶺大人追憶記念号となっています。

2. 頼 山陽と市河 米庵

文政7年（1824）9月20日、戸頭村の海老原喜右衛門は、四国の金毘羅参りの帰り道に京都に頼山陽（写真は4頁）を訪ねました。これは、書画を好む父に、山陽の書をみやげにと望んでのことでした。

山陽はその親を思う孝心に感激して、眼中涙をたたえながら快くその求めに応じたのでした。喜右衛門は、そのことを一刻も早く国元の父親に知らせようとして、その日の内に手紙を書いて出しています。

手紙には、喜右衛門と山陽とのやりとりが、会話形式で生き生きと書かれています。遠方から訪ねてきた喜右衛門をねぎらい、差し出した絹が小さいので、紙でよければもっと大きいものに書きましよう



頼山陽書
(取手市教育委員会所蔵)

と言う山陽。それではもっと大きい絹を入手してまたすぐ持参します、と答える喜右衛門。父や喜右衛門の号を聞き、ありふれたものではないと為書を書き加える山陽。この為書こそが、山陽と喜右衛門の出会いを今に伝える貴重な史料なのです。一般的に為書があると、美術品としての評価は低くなると言われていますが、金銭では計ることができない歴史的価値が為書にはあるのです。

頼山陽は、江戸時代後期の儒学者で安永9年(1780)に生まれ、天保3年(1832)に53歳で没しています。源平二氏の興亡から徳川幕府の確立までの武家の歴史を記した「日本外史」は、代表的な著作です。また漢詩も多くつくり、長崎に遊学した時に入手したフランス革命の情報から、ナポレオンを詠んだ「仏郎王歌」などが有名です。

喜右衛門に贈った書は、文政7年3月に山陽の母が広島から京都にくるので大阪まで迎えに行った時に詠んだ詩です。この詩は、母の乗った船が風雨にはばまれて到着が遅れたので、その身を按じつつ雨だれの音を聞きながらつくったものです。

喜右衛門が山陽を訪ねた時に、紹介状を書いたのが市河米庵(写真は4頁)です。米庵は、「幕末の三筆」の一人と呼ばれる書道家で、安永8年に生まれ、安政5年(1858)に亡くなっています。喜右衛門は、米庵の父の市川寛斎に短期間ながら弟子入りしていた関係から、紹介状を書いてもらったのです。山陽と米庵は、当時親しく交友していました。このような関係から海老原家には米庵の筆になる「間遊軒」の額が伝えられました(写真は4頁)。当時の有力農民の子弟が江戸に出て、有名な学者に弟子入りして勉学に励んでいた様子うかがえます。

3. 四代目 高砂 五郎次

市内上萱場の日枝神社の境内に、明治42年(1909)に建てられた五代目高砂五郎次の碑があります。高砂五郎次は、江戸時代の高砂部屋の四代目の年寄で、相撲界に名をなした人物です。碑文では五代目となっていますが、その理由は今となっては、わかりません。

この高砂五郎次は、市内上萱場の飯塚家の出身の力士で、天保11年(1840)10月に二ツ森の名で新序となり、同12年閏1月に序ノ口に出て二ツ森幸蔵を名乗りました。同14年1月には序二段、同15年1月には三段目、弘化4年(1847)11月には下の名を幸次と改め二ツ森幸次となり、次いで年寄の谷川円太夫を現役で襲名しました。しかし嘉永4年(1851)2月には、高ヶ峰五郎平と普通の四股名に戻り、翌年11月に年寄の高砂五郎次を襲名して、安政3年(1856)1月まで土俵にありました。

安政5年の年寄連名では35人目、慶応元年(1865)には24人目に名前が出ています。また同年には、下の名を五郎治に改めています。同2年3月12日に亡くなりました。高砂部屋は五代目以降は名跡が引き継がれず、明治時代になってから初代高砂浦五郎が引き継ぎ、それまでの高砂は高嶋と改称されました。



日枝神社境内に建つ五代目 高砂五郎次の碑(市内上萱場)

日枝神社の碑は、明治42年に高砂五郎次の追善供養のために、藤代で相撲興行が行なわれた際に建立されたもので、この時の板番付が残されています（写真は4頁）。この板番付には、当時の横綱常陸山と梅ヶ谷（写真同頁）や、大関の駒ヶ嶽・国見山をはじめ300人余の力士が名を連ね、盛大な相撲興行が行われたことがわかります。常陸山は水戸藩士の家の出身で、その生涯は数々のエピソードに彩られ、明治の角聖と称された名横綱でした。次に紹介する菊池幽芳とともに、現在の水戸市五軒町に屋敷がありました。

4. 菊池^{ゆうほう}幽芳

菊池幽芳は、明治時代の後半から大正時代にかけて、家庭小説の第一人者として活躍した作家です。その作品の多くは、新聞の連載小説として発表、その後単行本化されるとともに、映画や演劇にもなり、多くの読者・観客を引き付けました。

幽芳は、明治3年（1870）に水戸藩士の家に生まれました。旧制水戸中学（現水戸一高）を卒業後、取手高等小学校の教員となり、2年あまりの歳月を取手で過ごしました。当初は、学校の寄宿舎で生活しました。当時の寄宿生には、幽芳と同年、あるいは年長の生徒もいて、毎夜議論をたたかわせたそうです。後に下宿生活に転じますが、その時に隣の染物屋の娘さんだった杉浦玉枝と、相思相愛の仲となります。明治24年、二人は婚約しましたが、幽芳は大阪毎日新聞社の記者となり、大阪に行くことになりました。

大阪赴任を前に、幽芳と玉枝は長禅寺の三世堂にのぼり、三層目の高欄でしばしの別れを惜しみました。この時、日はまさに西に落ちようとして利根川の流れは金色に輝き、南西の空には富士山がくっきりと見えたそうです。

大阪毎日新聞の記者となった幽芳は、明治32年8月から「己が罪」を大阪毎日新聞に連載し、新聞小説としては空前の成功を収めます。また明治36年8月からは「乳姉妹」を同紙上に連載、^{ちきょうだい}「己が罪」をしのぐ人気を博し、作家として不動の地位を築きました。また山口県門司のセメント公害に取り組み、問題解決へと導きました。

さて幽芳と玉枝は、明治28年12月に結婚式を挙げ、終生幸せな家庭生活を送りました。幽芳は、昭和22年（1947）に77歳で亡くなりました。

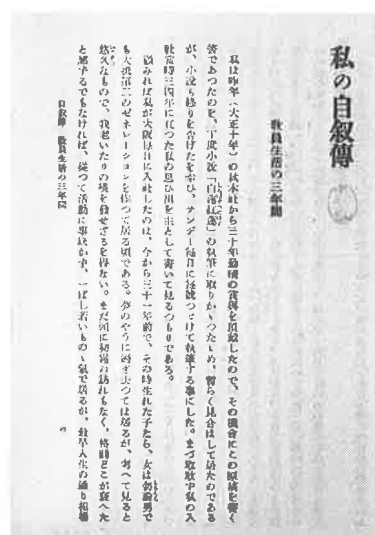


菊池幽芳
（大正13年3月刊「幽芳全集」第1巻口絵より、水戸市立中央図書館所蔵）



幽芳の妻の玉枝(右)と長女の芳江(左)
（明治34年5月刊「よっちゃん」口絵より、水戸市立中央図書館所蔵）

「よっちゃん」は、幽芳最初の子供の芳江を、愛情あふれる筆致で書いた作品です。



「私の自叙伝」
（大正14年2月刊「幽芳全集」第13巻所収、水戸市立中央図書館所蔵）

取手在住時の教員生活や杉浦玉枝との出会いなどの思い出の数々が、書かれています。



念仏院境内に建つ沢近嶺の歌碑（市内東）
「天つ神 おこせし道を 外国の 教へよりとぞ
思ふつたなさ」の和歌が、刻まれています。



頼山陽（京都大学総合博物館所蔵）
写真パネルで展示します。



渡辺華山筆市河米庵（京都国立博物館所蔵）
写真パネルで展示します。



市河米庵筆の「間遊軒」の額（取手市教育委員会所蔵）



板番付（取手市教育委員会所蔵）
明治42年に、四代目高砂五郎次の追善相撲
興行が藤代で開催された時のものです。



錦絵「化粧廻し姿一人立 常陸山谷右衛門」
（稲敷市立歴史民俗資料館所蔵）



錦絵「着物姿一人立 梅ヶ谷藤太郎」
（稲敷市立歴史民俗資料館所蔵）



菊池幽芳著「己が罪」口絵（取手市立図書館所蔵）

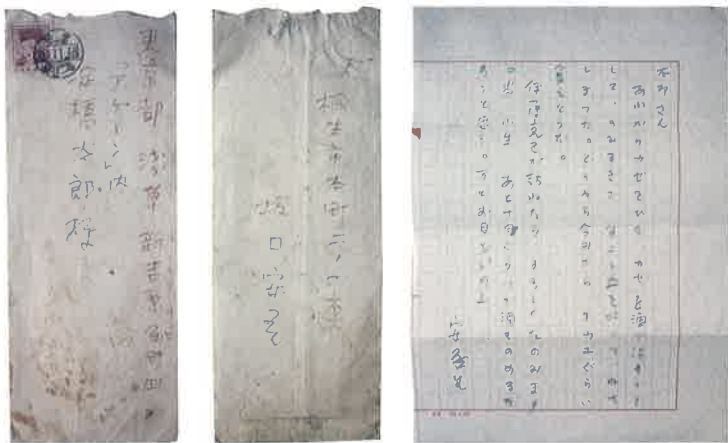
大阪毎日新聞に連載したものを、明治33年から34年にかけて前・中・後編の3冊にわけて単行本化した内の中編（明治34年1月刊）の口絵です。なお表紙で使用した写真は、明治33年8月刊の前編の口絵です。



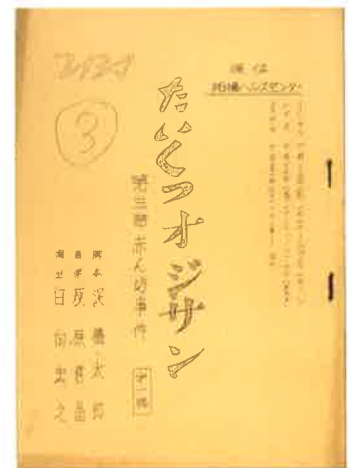
明治34年5月刊の菊池幽芳著「よっちゃん」（水戸市立中央図書館所蔵）



菊池幽芳自筆和歌書幅（貫井徹氏所蔵）
「花の王座 ここにさためて ひむかしの日いつるくにの 菊のはなさく」の和歌が書かれています。



昭和29年11月16日消印の淀橋太郎宛坂口安吾書簡（臼井キミユ・美登利氏所蔵）
左から封筒表面、同裏面、書簡本紙（縮尺不同）です。



淀橋太郎脚本「たいくつオジサン 第三話 赤ん坊事件」の台本（臼井キミユ・美登利氏所蔵）



竹村薫作「一刀彫猩々」
（臼井キミユ・美登利氏所蔵）

昭和40年12月に、「笑えば天国」の放送終了記念品として、淀橋太郎に贈られたものです。



昭和56年3月26日 北島三郎歌手生活20周年 新宿コマ劇場出演記念トロフィー
（臼井キミユ・美登利氏所蔵）



日本演劇協会功労表彰の記念盾
（臼井キミユ・美登利氏所蔵）

淀橋太郎は、昭和60年9月30日に日本演劇協会の演劇功労賞を受賞しました。

5. 坂口 安吾と淀橋 太郎

昭和14年（1939）8月1日、利根川で釣りをしていた父子（あるいは祖父と孫）がおぼれて、行方不明になりました。この時川に飛び込み、川底から子供の水死体を引き上げた人がいました。この人物が、戦後「墮落論」、「白痴」、「桜の森の満開の下」などの名作を生み、人びとの心をとらえた流行作家、坂口安吾でした。

安吾は明治39年（1906）に生まれ、昭和14年の5月半ばから翌15年の1月半ばまでの約8か月間、取手に滞りました。満33歳の時でした。取手在住時の安吾は、初の長編書き下ろし小説「吹雪物語」が不評で、失意の時代を過ごしたと言われていています。後に安吾は、取手での生活を思い出すのは苦痛であるとも、取手を再び訪れたこともなく、思い出すのも悲しいとも、書いています。

安吾の取手での生活は8か月ほどで終わり、神奈川県の小田原に転居しました。その理由は、取手の冬のあまりの寒さに音をあげたのだとされています。その後の安吾は、昭和17年には「日本文化私観」を発表、終戦後の昭和21年には「墮落論」、「白痴」、翌年には「桜の森の満開の下」を発表して一躍流行作家となり、時代の寵児ともてはやされました。取手在住期間は、まさに雌伏の時だったのかもしれませんが。その一方で薬物の服用や大量の飲酒で健康を害し、権威や権力に反抗する姿勢から無頼派とも呼ばれ、それがまた人気の源泉ともなり人びとを引き付ける魅力ともなりましたが、結局寿命を縮める結果となったことは否めません。昭和30年に、48歳の若さで亡くなりました。



代用教員時代の坂口安吾（世田谷区立世田谷文学館所蔵）
安吾は、大正14年に荏原尋常高等小学校下北沢分教場の代用教員となりました。この写真は、逗子海岸へ遠足に行った時の記念写真で、右寄りに写っている鳥打帽をかぶった人物が、安吾です。



安吾が下宿していた取手病院（海老原祥一氏所蔵）
取手に転居した安吾は、最初伊勢甚旅館に滞在し、後に取手病院裏の離れに移りました。



昭和14年9月19日刊「取手たより」
（取手市教育委員会所蔵）

安吾の名前は出てきませんが、利根川の川底から子供の水死体を引き上げた記事が、掲載されています。

さて市内には、昭和29年11月16日の消印で、安吾が淀橋太郎に送った手紙が残されています（写真は5頁）。「太郎さん」との呼びかけで始まるこの手紙には、風邪を治そうと酒を飲みすぎて血を吐いてしまったと近況が、書かれています。

淀橋太郎は劇作家として名高く、新宿コマ劇場や国際劇場で上演された美空ひばり・三橋美智也・村田英雄・北島三郎・藤圭子などの特別公演や松竹新喜劇、また「笑えば天国」・「いかすぜ珍商売」・「町の人気者」・「たいくつオジサン」などの舞台中継テレビ劇の脚本や演出を担当し、多くの人びとに夢と希望を、涙と笑いを与えました。自分の人生を題材としながら、こよなく愛した浅草の地に生きた有名無名の人びとを、独特の情感あふれる文章でつづった「ザコ寝の人生」と「浅草ラブソディー」の著作があります（写真は表紙・5頁・裏表紙）。

安吾との親交もあつく、先の手紙からも両者のつながりが偲ばれます。淀橋太郎は平成元年（1989）に取手に転居してきて、同3年に83歳で亡くなりました（生まれは明治40年です）。わずか8か月とはいえ安吾が住んでいた取手に、その安吾と親交が深かった淀橋太郎が移り住み、最晩年の3年間を過ごしたことに、何か奇しき縁を感じずにはられません。



淀橋太郎（臼井キミエ・美登利氏所蔵）
昭和45年に最初の著書「ザコ寝の人生」を出版した時の、祝賀会での光景です。



晩年の淀橋太郎
（臼井キミエ・美登利氏所蔵）



昭和11年3月、淀橋太郎作
「コント 厚かましい悩み」台本
（臼井キミエ・美登利氏所蔵）

大阪在住時代の淀橋太郎初期の作品です。ペンネームの淀橋は、大阪の淀橋区に住んでいたことから付けたとされています。大阪市の検閲済印が、時代を物語っています。

6. 高野素十と軽部烏頭子

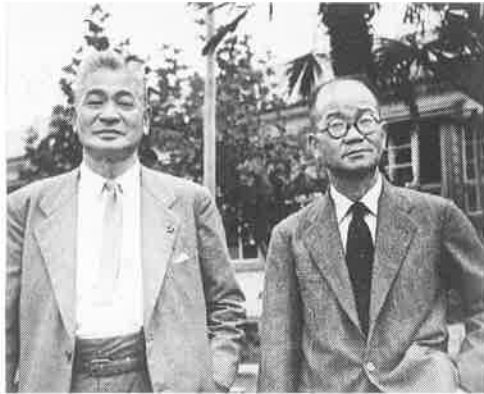
山王公民館の玄関前に、「ふるさとを 同うしたる 秋天下」の俳句が刻まれた石碑が建っています（写真は表紙）。秋天下とは、高く澄みわたった心地よい秋の空を言うそうです。この秋空の下に、ふるさとを同じくする人びとが、和気あいあいと集っている様子を、詠んだ俳句とされています。

作者の高野素十は、市内神住の農家に明治26年（1893）に生まれ、医師として、そして俳人として活躍した人物です。東京帝国大学医学部を卒業し、法医学と血清学を専攻、後に新潟大学で教鞭を取り、ドイツにも留学して血清学や細菌学を学びました。昭和28年（1953）に新潟大学教授を退官後は、奈良医科大学の法医学教授となり、昭和51年に83歳で亡くなりました。

素十は医学の世界以上に、俳句の世界で有名で、その名前や作品は教科書にも載っています。5冊の句集を刊行し、「素十全集」四巻や「素十全句集」四巻（写真は裏表紙）も編さんされています。

素十は、明治38年に新潟の叔父の下に身を寄せ、長岡中学に進学して以来、郷里に住むことはありませんでしたが、郷里の風物や人々を愛し、しばしば帰ってきています。昭和30年には、当時の山王中学校で「志を高く」の題で講演し、中学生を前に志を立て、自主自立の夢を育ててほしいと話し、大きな感銘を与えました。

生前から句碑建立の話がありましたが、「そういうお金があれば、子供たちに学用品をあげなさい」と言って固く辞退したそうです。最初に紹介した句碑は、素十の没後に夫人の許しを得て、建てられたものです。



高野素十（左）と弟の高野純三郎（右）（前野茂氏所蔵）
高野純三郎は、山王村長や岡堰水利組合の理事長などを勤めた名望家です。郷里に帰った素十は、純三郎宅に泊まり人びととの親交を深めました。



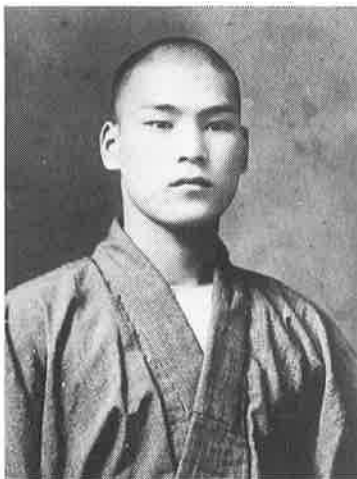
昭和30年10月に、山王中学校創立10周年を記念して講演する素十（前野茂氏所蔵）

軽部烏頭子は、明治24年（1891）に市内の浜田に生まれました。医師を志し、^{ドイツ}独乙協会中学校、旧制第一高等学校から東京帝国大学医学部に進みました。中学から大学まで同期であった水原秋桜子は、終生の親友であり、また俳句の師でした。学生時代は柔道や短艇の選手として活躍し、きわめて剛毅な性格だった反面、繊細な性格も併せ持ち、それが後の俳句の作風にもあらわれています。

大学卒業後は朝鮮慶尚北道金泉病院長となり、この頃から俳句をはじめました。「ホトトギス」の会員となり、高浜虚子に師事しましたが、昭和6年（1931）に水原秋桜子が「ホトトギス」を脱会し「^{あしび}馬酔木」を創刊すると、秋桜子と行動をとともにして「馬酔木」筆頭同人になりました。

昭和7年には大分県別府市で開業、同11年には土浦市で内科・小児科を開業し、医師としてのかたわら多くの同好者とともに句作に励みました。昭和31年に浜田に戻り開業し、同38年に73歳で亡くなっています。

句集としては、昭和10年刊の「^{しどみ}櫨の花」と同18年刊の「^{ひむし}灯蟲」があります。没後第1回馬酔木賞を受けるとともに、1周忌にあたり土浦市の川口運動公園内に句碑が建立されました。碑には、「^{はつかり}初雁に まきれなかりし 夜の雨」の句が刻まれています。



軽部烏頭子（平本重喜氏所蔵）
旧制第一高等学校か東京帝国大学在学中の撮影と思われます。



水原秋桜子（左）と軽部烏頭子（右）
（「馬酔木」昭和31年9月号、平本重喜氏所蔵）

素十も烏頭子も、医師として、また俳人として最も気力充実して活躍した頃は、取手には住んでいませんでした。また同郷の出身であり、経歴も共通する二人でしたが、両者の間には深い親交はなかったようです。

7. 高村 光太郎

高村光太郎は、明治16年（1883）に生まれました。父は、明治彫刻界の巨匠高村光雲です。東京美術学校に入学して彫刻、洋画を学び、卒業後にアメリカやヨーロッパにも留学しました。帰国後は詩作に転じて、妻の智恵子との恋愛時代から結婚生活、そして闘病生活を歌った「智恵子抄」は、あまりにも有名です。

この智恵子の身のまわりの看護をしたのが、智恵子の姪で看護婦の資格をもっていたはる子です。そしてこのはる子が、取手の宮崎稔の妻となったのです。この関係から、光太郎は何度か取手を訪れ、「利根川の美しさは空間の美である」との名言を残しています。

今回展示の手紙は、昭和24年（1949）に岩手県の太田村（現花巻市）から取手の宮崎稔にあてたものです。光太郎は昭和20年、岩手県に疎開して10月からは太田村の山小屋で独居自炊の生活にはいります。後に東京に戻りましたが、昭和31年に73歳で亡くなりました。



高村光太郎（北川太一氏提供）
昭和26年に岩手県の太田村で撮影された
写真です。



昭和24年2月14日付宮崎稔宛高村光太郎書簡（取手市教育委員会所蔵）



コラム・宮本 茶村

宮本茶村は、寛政5年（1793）に潮来で生まれ、文久2年（1862）に70歳で没した人物です。若い頃に江戸で学び、郷里の潮来に戻り家業を継いだ後、隠居して学問や教育に専念しました。常陸国の歴史についての多くの著作があり、また凶作に備えて義倉を設置しました。これらの業績により、水戸藩から郷士（武士に準じる身分）に取り立てられています。また風雲急を告げる幕末の水戸藩政にも、かかわりを有しました。

埋蔵文化財センターでは、茶村のご子孫の方が市内に住んでいることから、今後茶村の業績を広く紹介する企画展を開催する予定です。そこで今回の記念企画展の開催にあたり、数点の資料を展示します。



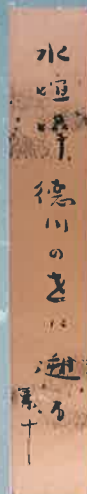
平成元年刊の淀橋太郎著「浅草ラプソディー」
(臼井キミエ・美登利氏所蔵)



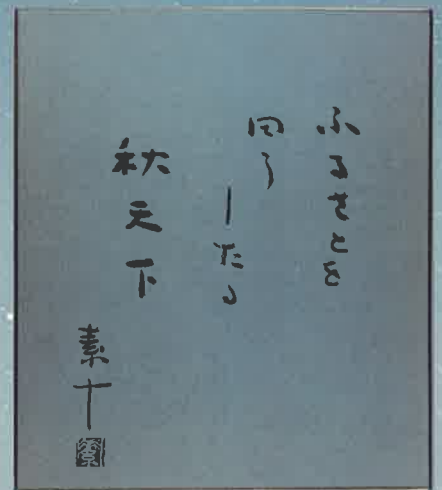
今村恒美筆「太郎観世音大菩薩」(臼井キミエ・美登利氏所蔵)
平成3年に淀橋太郎が逝去された後に、遺族に贈られた絵です。今村恒美は、著名な挿絵画家です。



昭和54年12月刊「素十全句集」四巻
(前野茂氏所蔵)



高野素十俳句短冊 (前野茂氏所蔵)
「水喧嘩 徳川の世に 遡る」の句が、書かれています。



高野素十俳句色紙複製 (前野茂氏所蔵)
昭和59年に山王公民館の玄関前に素十の句碑が建立されたのを記念して、素十夫人の富士子さんが翌年3月に関係者に配布した複製の色紙です。句は「ふるさとを 同うしたる 秋天下」で、この句が石碑に刻まれています。



昭和28年2月刊「灯蟲」(平本重喜氏所蔵)
軽部烏頭子の2冊目の句集です。題名は、収録されている句の「加速度もていのち搏たむと灯虫をり」から付けています。



軽部烏頭子俳句短冊
(左2点は平本重喜氏、右1点は平本重男氏所蔵)
句は左から、「人の手に たわむ 枯野の 鉄搬ふ」、「尾根のまに 照る 雪虫や 湖の航」、「水稲を 刈るが 悲しと なげきつつ」です。



軽部烏頭子俳句色紙額装 (土浦市立博物館所蔵)
句は、「秋の暮 つなかれて 鞍馬 地平を見る」です。